



こども 歴史 なぜなに 相談室



博物館には甕や壺がたくさん並んでいますが、いったい甕と壺はどこが違うのですか？

博物館には、中世の港町・市場町のあととして有名な草戸千軒町遺跡から発見された遺物がたくさん展示されています。そのなかで特に目をひくのが焼き物の甕や壺ではないでしょうか。しかし、見た目では同じように見える甕と壺のいったいどこが違うのでしょうか。



壺



甕

甕と壺はどちらも“もの”を貯えておく容器として使われるものですが、一言で言えば、甕は頭部が小さく口が大きく開き、下にいくほどすぼまっている形のものを、また、壺は口が細くつぼまり、中央部が丸くふくらんだ形のものをさします。

弥生時代には、主に甕は煮炊きとして、壺は貯えるものとして使われていましたが、中世になると、甕と壺のどちらも水・油・穀物などの貯蔵用として多く使われるようになり、設置して移動させずに使うものを甕、移動させて使うものを壺としています。しかし、強いて言うならば、甕は口が開いているところから、日常ひん



草戸千軒実物大復原の焼き物売り場の甕と壺



草戸千軒町遺跡で見つかった穴に据えつけられた大甕

ぱんに使うものを貯えておくのに対し、壺は口がつぼまっているところから、ある期間少しずつ使うものを貯えておいたと言えるでしょう。

そうしたなかで、甕がもっとも使われたのは、飲料水の保存にありました。いわゆる水甕と言われるものです。私たちは、今でこそ水道の蛇口をひねれば簡単に水を得ることができますが、水道が日本全体に普及したのは、わずか50年前のことでした。それまでは井戸や川などから水を汲み上げ、台所まで運ばなければならず、その苦労は大変なものでした。そして、昔はそれが家事のなかの大事な仕事の一つだったのです。

草戸千軒町遺跡からは遠く岡山県の備前焼や愛知県の常滑焼などの大甕が多量に出土しています。これらは重くかさばるため、陸路で運ぶには限界があることから、船が主要な運搬手段でした。かつて港町であった草戸千軒町遺跡から甕や壺がたくさん出土するのも、ここに理由があったようです。



草戸千軒町遺跡から出土した甕と壺

博物館にある甕や壺を見ながら、昔の人々の暮らしぶりなどを思い浮かべてみてください。